友愛

機関紙「友 愛」
発行所
(財)日本友愛青年協会
〒112-0002　東京都
文京区小石川1-10-13
松本ビル2F
TEL 03-5684-3188
FAX 03-5684-3186

（題字・鳩山一郎先生）

発行人：川手正一郎
編集人：萩原直三
隔月一回　10日発行
講読料
年間　3,000円

鳩山一郎先生を支えて

忘れ得ぬ人・薫先生

暑い夏が巡ってくると、私たちは必ず、あの慈愛に満ちた「友愛の母・薫先生」を想う。「薫先生は、常に『友愛』は鳩山のし残した仕事だからと口ぐせのようにおっしゃっていた」（深津栄一副会長「鳩山薫先生と友愛」『友愛』第二七四号）そうであるが、まさにそのお言葉どおり、第三回全国大会（昭和三十一年）に病身の一郎先生の代理として出席されて以来、昭和五十七年に逝去なさるまで、薫先生は常に私たちの「友愛運動」を温かく見守ってくださった。その意味で薫先生は私たちの心の拠り所でもあった。

今年の鳩山会館は「鳩山一郎と薫の青春」と題して写真展を開催した。そこにはすでに、優しく一郎先生を支える薫先生の眼差しがある。今回も同会館のご好意により貴重な写真を拝借したので、そのうちの薫先生に因むものを中心に、この九月号は〝紙上『写真展』〟の開催ということにした。

優しさと気品に満ちた薫先生

日本を代表するジャーナリストとして活躍した故大宅壮一氏は、薫先生について「アメリカのルーズベルト夫人、中国における宋美齢夫人などがそれぞれの国のファーストレディだが、日本でこの種の女性を求めるならば、まず第一に鳩山薫子夫人の名をあげねばなるまい」（「鳩山薫子論」『文藝春秋』昭和三十二年二月号）と評した。

それは「総理の夫人であったからという点を離れても、彼女は第一級の婦人である」と、ほとんど人を誉めたことがないといわれる大宅氏が、最大級の賛辞で称えている。既に薫先生は、例えば昭和三年の『サンデー毎日』（二月五日号）などで「理想的の妻・賢夫人」という特集を組まれたりしているから、その気品ある美しさや飾らないお人柄、そして何よりも一郎先生を控えめに、しかししっかりと支える細やかな気遣い、教育者としての愛情と仕事ぶりなどには、おのずと高い注目が集まっていたものと思われる。大宅氏はそういう点も踏まえ「一時は病軀のため政治的にも絶望視された鳩山が、ついに政権の座につき、歴代首相の中でも珍しく、野党党首からも鄭重な送別の言葉を受け、全議員の拍手を浴びながら花道を退いたということは、日本憲政史上前例のないことであるが、これは薫子夫人の涙ぐましい努力とともに、まれにみる才能、手腕の賜物であることは誰もが認めるところである」と語る。さらに辛口で鳴る細川隆元氏は「薫子夫人は妻、母、政治家夫人、社交婦人、教育家、その他いずれの点から見ても九十五点以上だ」と述べたが、一郎先生は「〝今日あるのは薫子のおかげだ。薫子がいなかったら、私は政治家を断念して弁護士で世を渡っていただろう〟と、素直に妻の薫子夫人に満点をつけた」（『友愛の精神を受けついで』『週刊文春』昭和三十四年五月十八日号）という。その五年前に一郎先生は「薫と結婚して以来四十六年である。この永い間ずいぶん妻の世話になった。まず第一に、妻はまれに見る多忙の人である。が良く頑張って片端から仕事をかたづけてゆく。ぼくは十数回選挙をした。妻が選挙の統率者である。したがって選挙区内の仕事、選挙人との面接、すべて妻の仕事である。この他に共立学園の仕事もあり、また、ひまがあれば、ぼくに生命の実相や漱石の小説などを読んでくれる。妻の内助の功は大きい」（「妻を語る」『週刊朝日』昭和二十九年十月三日号。総理に就任する二ヵ月前）と「少々鼻の下を長くして」語っている。どちらにしても、またどこまで行っても仲睦じいご夫妻である。それに加えて「いつも明るくて、健康で、大まかで、のんびりして、側にいるだけで、心が豊かになるような母」と百合子さん、玲子さんなどお嬢さん方が敬愛の言葉を捧げている。一郎先生亡き後、薫先生の見事な演説ぶりと識見を知る人々から「政治家に」という声が上がったが、そんなとき、〝私は鳩山一郎あってこそ、皆様に大切にしていただいていたのです。もう私の出る幕ではありません〟とたしなめるようにおっしゃったと

大会で挨拶する薫先生

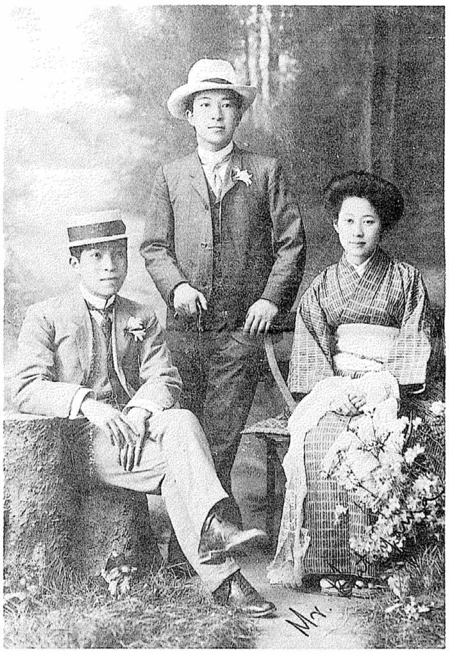
薫先生と弟妹の皆さん

第2次鳩山内閣のパーティー

いう（前掲『週刊文春』）。薫先生は、いつでも「理想の妻、賢夫人として、美しくひたむきに人生を過ごされた」（『週刊女性』一九六四年七月一日号）と評されるが、また「私の所は何てんでしょうか。似た者夫婦というんですか、開けっ放しがウチの家風になってしまっているんでしょうね。いまさら急に閉めようといったって、閉まりがつかないんですよ。以前は鍵もかけずに寝ていましてね。泥棒に入られたので、それ以来まあ、鍵だけはかけるようになったんですが、大体のんき者が集まっているんですね」とあっけらかんと語る家庭婦人としての姿もある。（近藤日出造「鳩山薫」『中央公論』一九七〇年二月号）。

「考えてみれば夫人の生活は、何もかも妻であること、母であることが土台になっていた」（前掲『週刊文春』）のである。昨年の小紙「薫先生特集号」（第四三五号）で、井上和子氏（当財団常務理事・威一郎先生の長女）が「同じ家で暮らしていた私でさえ、祖母の乱れた姿を……容姿に於いても、言動に於いても……全く見た事がない。本当に見事な生き方」を語りながら、「傷みかけたみかんも、『少し傷んでいる位の方が美味しいから』」と口にして、自然な形で「きちんとお手本を示してくれた」こと、さらには、「山本周五郎の小説『長い坂』を通じて、それとなく（孫に）性教育も教えてくれた」というエピソードも紹介してくれていた。そういう形式ばらぬ、それでいて品を失わぬ温かいお人柄だから、薫先生に接した人は、皆その魅力にまいってしまったのであろう。

ここに掲載した写真を拝見していると、薫先生の〝歴史〟が垣間見えてくるが、同時に薫先生と共有した〝時〟の疾さにも気づかされる。しかしまた、先生が私たちの心の中に生きていることを思えば、時間を超えた世界の存在も感じられ、今でもお庭でバラの手入れをなさっているのではないかと、ふと、そんな思いにとらわれる。



左から弟・秀夫氏、一郎先生、薫夫人

友愛婦人会親睦旅行
「日光江戸村」へ

去る5月18日（火）に、友愛婦人会の恒例の旅行が開催された（担当・本富士支部）。今回は「日光江戸村」であった。会員の皆さんも「忍者からす屋敷」や「南町奉行所」などで、たっぷりと江戸時代の雰囲気を楽しんできたようである。友愛婦人会は、薫先生の後、安子会長を中心に福祉事業、文化・教育事業などに熱心に取り組んでいる団体である。友愛精神と女性の優しさを融合させながら、家庭・地域においても大きな役割りを果たしている。また男女共同参画時代を迎えて、さまざまな社会活動にも積極的にかかわっている。

《総務庁青年国際交流事業》
大阪市立大学法学部
宮崎はるかさん、タイへ

総務庁の実施する平成十一年度の標記事業に、「友愛」から推薦した大阪市立大学法学部の宮崎はるかさん（京都）が、十月十六日から十一月七日までタイの青年との交流に派遣されることになった。はるかさんのお姉さんの「のどかさん」は、平成十年度の同事業でブラジルに派遣されている。国際交流に大変熱心に取り組んでいる宮崎さん姉妹に大いに期待している。

静和

♥毎年八月は、日本にとっていろいろと感慨深い月です。近くて遠い国といわれるお隣の韓国（大韓民国）では、「日本と仲良くすること」の方向へ少しずつ意識が変わってきたと、先日のNHKの番組が特集していました。また八月十五日の「光復節」は、従来〝反日〟がメインテーマでしたが、今回はそうではなくて「南北対話」が主要なテーマとして報道されていました。♥韓国政府の反日教育の政策転換もあり、戦後五十四年を経て「戦争を知らない世代」には、そういう不幸な歴史を乗り越えていこうとする感情も生まれているようです。しかしわが国では、たとえば私は周りに多くの在日朝鮮人の皆さんが住んでいる環境に育ったのですが、依然として「偏見」「不信」などが、相互に残っていることを否定できません。わが国が過った歴史を作ったことによって、一層こじれていることを実に残念に思います。♥混み合った電車の中で足を踏まれても、踏んだ人は詫びることなく知らん顔をしていることも多いのですが、踏まれた痛さはいつまでも残ります。わが国の「歴史」は、お隣・朝鮮半島の国を意識的に「踏んで」います。その朝鮮半島は、今も南と北に分かれたまま、複雑な政治状況にあります。特に北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）は、危機的な食糧事情を抱えたまま、軍事力を誇示し、世界に対し、とりわけ日本に対し頑なな姿勢を取り続けています。♥その昔、高麗や百済の人と文化を受け入れたわが国ですが、こうした現状では、なかなか素直になれない「わだかまり」があります。しかし、最近「従軍慰安婦の過去の拘りで、これからの将来を決めてはならない」との発言を聞き、勇気を与えられました。これからも課題は出てくるとは思いますが、相互尊重・相互理解・相互扶助の「友愛精神」で、隣国を理解していく行動を取ろうと心に決めました。（長）

友愛革命の意義

自立と相互扶助の精神　鳩山一郎

一郎先生は常に「人間が他人を愛することや、善とか美を忘れ、自分のことにとらわれている主権在民ではうまくゆく筈はなく、もとより社会の発達も福祉の向上も望めない」（機関紙創刊号）と語っている。また、国会での就任演説では「何よりもまず国民各自の個人道徳の高揚をはかり、道義と相互扶助の精神を基調とした社会道徳を確立しなければならない」（昭和三十年一月二十二日「第二十一回国会」施政方針演説）と訴えた。

混沌とする時代にある今こそ、こうした一郎先生の精神を生かす時ではないかと考え、『友愛』第三号（昭和二十八年四月二十五日）から、その要旨を転載した（紙幅の都合で一部省略、表記も若干改めた）。

戦後私が追放を解除されて政界に復帰したときの第一声に、民主政治確立の基礎として友愛革命の必要を力説したのだが、では、私がどうして「友愛革命」という表現を用い、それが具体的な運動の展開を唱えるに至ったかについて、その根本の動機と目的を重ねて説いてみたいと思う。

実を言えば、この「友愛革命」という言葉は、私が訳出したカレルギー伯の『レヴオルーション・フオア・フラタニティ」で説かれてある自由と寛大、人道における協同一致と、それによる階級戦の終息という友愛革命の目的と、自己完成を目指す人格主義及び協同主義という友愛革命の精神……この二つが特に私の理想、私の念願と一致していたからなのである。と申すのも、敗戦後国民すべてが暗澹たる自棄に陥って、かつて同胞を結び合わせていた精神的靱帯がばらばらに解き裂かれ、銘々が他を信ずる力もなければ自己を信ずる心すらも失って四分五裂の離散状態となってしまった実相があるからである。ここで何とかして思想的精神的に挽回の道を講じなければ、民主政治の確立はおろか、国家の再建、民族の独立もまた到底覚束ないと痛感した結果、その最も捷径として私は友愛の精神に求めたわけである。

友愛は相互の信頼と利他互譲の精神に立つ限り、一部特定の利益のために他人の権利を侵し、その立場を犠牲にするというような非人道的なエゴイズムを許さない。民主主義とは、自己の人格を尊重すると共に、他人の人格も尊重することであり、その根本こそ実に友愛の精神である。友愛革命とは、じつにこれによって偏狭な個人的ないしは集団的エゴイズムを克服し、排他的独善性や階級的身分的割拠主義を超克し、相互の依存関係を正しく認識して社会的連帯を強化するための精神革命に他ならないのであって、この運動が具体的に展開されるにつれて、民主社会もまたおのずと促進されることは、けだし期して待つべきものであることを確信しているのである。

■友愛クラブ第356回

去る七月八日（水）、第３５６回の友愛クラブが朝日新聞編集委員の早野透先生をお迎えして開催された。ご承知のように早野先生は、毎週火曜日の同紙に「ポリティカにっぽん」を連載されているが、そこでは常に鋭く、そして分かりやすく「日本政治と人」を語っている。今回は、「巨大与党のなかに自制力が働かないと、日本全体が暴走することになる」と、今日の「総与党体制」への危惧も語った。同時に民主党の責任の重さについても語った。なお先生の近著には、先の「ポリティカにっぽん」をまとめた『連立攻防物語』（朝日新聞社）がある。当日は、鳩山由紀夫氏も参加した。九月の例会には、「世界の混迷する民族・宗教紛争」と題し、日本大学国際関係学部・大学院教授の青木一能（あおき　かずよし）先生をお迎えする予定である。

鋭く政治を語る早野先生

友愛論壇

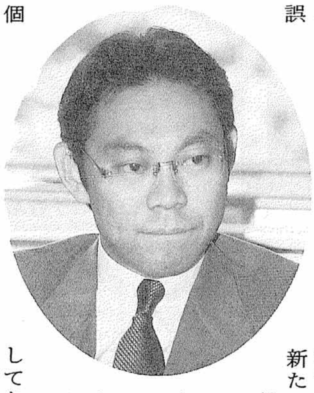
「21世紀・友愛社会の実現を」
人類の叡智を結集して

参議院議員　小川勝也

私たちは、まず、次世代にどんな国や社会を残していけるのかということを考えておかねばならないと思います。戦後から今日までの、いわゆる高度経済成長政策によって、物質的豊かさを得ましたが、「モノ・カネ」にとらわれ過ぎて、人間として大切な「こころ・人間としての徳」を見失ってきたように思います。その意味でいえば、現代は「カネを得ること、あるいはその道に近いこと」の価値が相対的に高まり過ぎた時代だといえます。

しかしこれは明らかな誤りです。よく父は私に「人間にはいくつもの『幸せ論』があるべきだ」と申しておりますが、個性というもの、人としての多様性の存在を認め合う社会こそ真に豊かな社会だと思うのです。もちろんこうなっている理由を社会の問題だけに帰着させるわけにはいきません。その基礎単位である「家庭」において、まず取り組まねばならない課題です。

私は子供を持つ親になってまだ三年ですが、そうしたことを痛感します。特に「こころ」の問題で申せば、そこに「新たな価値観の創造」が必要だと考えています。それは遠くにあるものではなく、私たちが学んできた、まさに「友愛精神」の「相互尊重・相互理解・相互扶助」の実践の中にあります。自己の尊厳を高めていくことを通じて、他者への真の「愛」が生まれます。国会でも「ＮＰＯ」への議論がなされていますが、高齢社会も、福祉社会も、あるいはすべての社会の問題も、「自立と相互扶助の精神」による人と人との新たなネットワークで社会全体を機能させていくという「道」を選択すべき時代なのです。



人間は科学技術の恩恵を受けてきましたが、それによって、かけがえのない自然を破壊してきたことも事実です。人類は多様な生物の「one of them」でしかないのに、地球を征服したような顔をしているのは大きな誤りです。国会の質問でも取り上げましたが、ダイオキシンを含め、生命体の危機を招く新たな環境ホルモンも人類は生んでしまっています。こうしたさまざまな地球的な問題を、いかに解決方向に持っていけるかに「人類の叡智」の結集が求められています。

次世代に、自然を畏れる社会を、そして人間の尊厳を高め多様な価値を許容し合える友愛社会を、ぜひ築いていきたいと考えています。

（（財）・日本友愛青年協会評議員）

ゼミ・サークルの研修に

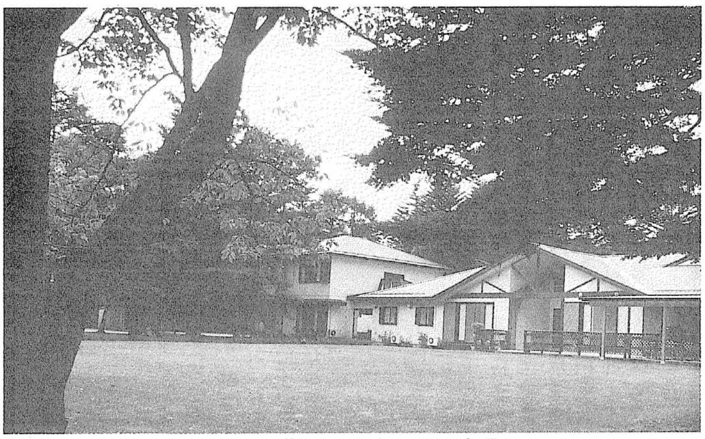
友愛山荘、一段と充実

―ご家族の保養にも―

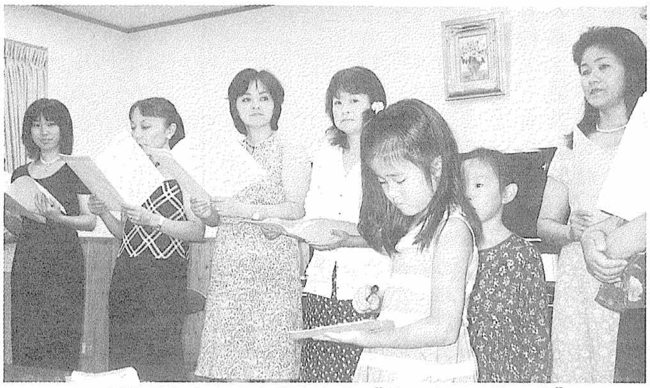
「昭和三十四年六月二十八日、軽井沢の空はつゆにはめずらしく、まばゆいまでに太陽が輝き、集まる人の顔も晴れ晴れとしていた。この日故鳩山一郎会長ゆかりの地に軽井沢友愛山荘の落成式が行われたのである。木の香も新しい山荘前庭には、紅白の幕が張りめぐらされ、万国旗で飾られた式場には故鳩山一郎会長の遺影が飾られた」と、当時の機関紙『友愛』（第七十六号）は、その高揚した喜びを伝えている。一郎先生は、GHQの内部抗争のあおりで組閣寸前に「公職追放」に遭って軽井沢で日々を過ごされることになるのだが、これについて薫先生は、「軽井沢での生活は、そこに至らせた屈辱とは別に、私達夫婦を自然の中に解き放してくれる、快適なものでございました」と述懐する。さらに「鍬をふるって大地を耕し、残る時間を読書に費やす。地味ではあるが、一日をふるに使いきる楽しさをあらためて知ったのでございます。〈略〉このような生活の中で、私達は農民の苦しみと底辺にいる者の悲しみを、身をもって体験し得たことは、生涯においても貴重なひとときであったと感謝しております」とまで語るのである（鳩山薫『おもひで』）。

一郎先生もまた「軽井沢で過ごした日々は静かであった。晴れた日々はゴルフや畑仕事や庭いじりに、雨が降れば、囲碁や読書に日を送っていた。美しい自然と孫たちに囲まれながら、私は全く一介の老農夫に甘んじて観照と省察に時を送っていた。いま考えれば、まことに貴重な数年間であった」と語っている（鳩山一郎『私の自叙伝』）。折に触れて、現在「友愛山荘」をご利用くださる方にも、ぜひ、この地での一郎先生と薫先生の「友愛精神」を知っていただけたらと思う。

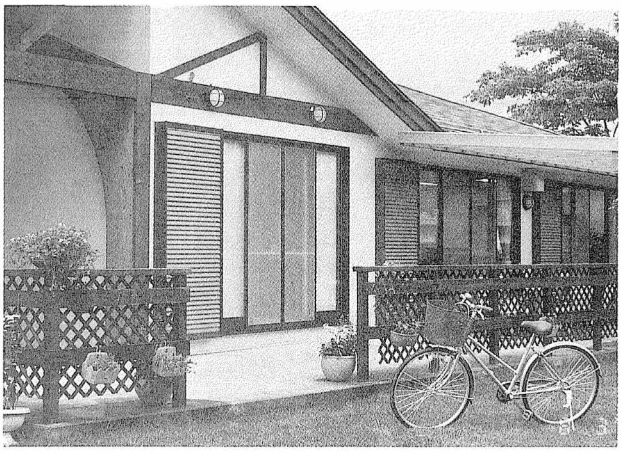
それはともかく、今年の「友愛山荘」は、井上常務理事の寄付によりさらに設備を充実させている。研修室には「ホワイトボード」「大型テレビとビデオ」を完備したので、大学のゼミ・サークル合宿、企業の研修などにもより使いやすくなった。食堂のテーブルと椅子も新しく、また各室にテレビも備え、自由に使える自転車も用意したので、ご家族、グループでの保養にも最適かと思われる。ピアノは以前から活用していただいている。その他では、ベランダも屋根付きに改装したので、雨天でもバーベキューパーティが可能である。もちろん広い庭にはお洒落な椅子とテーブルがあるので、木陰での読書も、楽しい語らいも、賑やかなガーデンパーティもOKである。テニスやバレーボールで快適な汗をかくのもいい。先日は「尾崎行雄財団・咢堂塾」の合宿セミナーも開催されたり、武蔵野音大の島崎照代先生や藤井俊男議員の皆さんたちで〝ホームコンサート〟も開かれた。由紀夫先生も飛び入り参加した。宿泊料金は一泊二食で大人七、二〇〇円、学生六、六〇〇円とリーズナブルである（十名以上の団体ならば大人は六、六〇〇円、学生は五、七〇〇円）。軽井沢というと「夏だけ」というイメージがあるが、実は一年を通じて四季それぞれの〝軽井沢〟がある。秋には紅葉と静寂に包まれての散策もよい。冬にはスキー・スケートの拠点としても便利である。「友愛山荘」はきっと皆様の心を癒してくれるものと思う。（暖房完備。詳しくは財団事務局☎〇三―五六八四―三一八八・FAX〇三―五六八四―三一八六へどうぞ）。



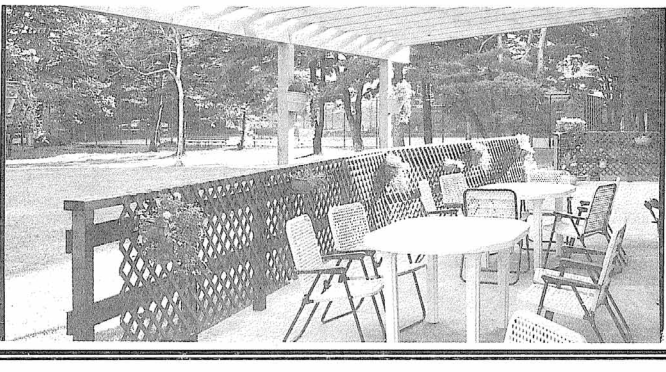
友愛山荘の広い庭からの全景



武蔵野音大ＯＧの皆さんと“ホームコンサート”

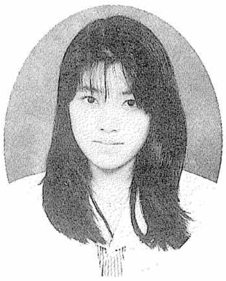


左から藤井俊男参議院議員、島崎先生、由紀夫先生



《日中青少年交流代表団》倉賀野恵子さん・三村敬子さんが参加

三村敬子さん



倉賀野恵子さん

昨年十一月の江沢民中国国家主席の訪日時に合意された「日中両国政府間の取り決め」に基づき、両国の若い世代の各界代表百人ずつの相互訪問が今年から五年間にわたって行われることになった。

「友愛」からは、倉賀野恵子さん（淑徳短期大学講師）と三村敬子さん（「ファッションソーイング協同組合」・中国研修生受入業務及び通訳業務等担当）が参加することになった。日本代表団は十月二十三日から十月三十一日まで中国各地を訪れ、中国政府首脳との会見や青少年との交歓、企業・職場の訪問、ホームステイなどを行ってくる予定である。お二人には、ぜひ「友愛精神」を発揮してさらなる友好を深めてきていただきたいと思う。